

イスラームの世界観と宗教対話

中 田 考

ただいまご紹介に預かりました中田と申します。今日は「イスラームの世界観と宗教対話」という題目でお話させていただくのですが、あまり宗教対話という話には踏み込まないと思います。私自身がイスラム教徒、ムスリムであります。宗教対話については質疑応答の時間をとっていただけるようですので、その時にお話をさせていただきたいと思います。それでは話を始めさせていただきます。

【イスラムの世界観・人間観】

今日はイスラームと他宗教とのかかわりについての話に焦点を絞ってお話したいと思ってます。まずイスラームという言葉の意味を説明することから始めたいと思います。イスラームというのは、キリスト教や仏教が創始者の名前からとった宗教名となっているのと違って、ムハンマドという創始者の名前とはまったく関係のない名前です。イスラームというのは普通名詞で「帰依」ということです。イスラームというのは、もともとはアラビア語のサラーム、「平和」という言葉があるのですが、この言葉から派生するもので、相手を平和にするという、他動詞化するのです。相手を平和にする、要するに自分が武装解除するかたちで、すべて捧げる、献身する、絶対的に服従する、降伏するという意味の普通名詞です。そういう意味で、イスラームというのは、もちろん宗教の名前でもあるわけですが、それ以上に宇宙の姿なんですね。宇宙すべてが神にイスラームしているというふうに考えます。ご存知の通り、イスラームは

キリスト教、ユダヤ教と同じセム系の一神教で創造主と世界が絶対的に違うという考え方をとりますので、神（アッラーフ）は、世界とはまったく隔絶した他者なわけです。その他者に対して、世界がすべて服従している、絶対的に帰依していると、これがイスラームの教えの根本的な世界観です。そういう意味で、イスラームというのは、まず宇宙全体の姿なのです。これが広い意味でのイスラームになるわけです。

イスラームという言葉にはそういう意味で3つの層があります。1つの層は、今述べた世界全体がイスラームをしているという層です。その次に人間の宗教としてのイスラームがでてきます。これは世界の中で、宇宙の中で、人間は存在論的に他のものと違うのです。何が違うかという、イスラームにおいては人間だけが神に逆らう自由がある、自由意志があるのです。「自由意志」という言葉はイスラームではあまり聞かなくて「選択」というふうにいいます。人間は神に逆らうことができる、この部分が他の被造物と違うというふうにイスラームは考えます。もちろん物理的な存在としては、人間も他のものと全く変わりません。われわれも物理的存在としては、そういう神の定めに従うことはできないわけですが、それとは別に神の定めには自然法則とともに道徳という戒律があって、そちらのほうについては、人間は選択の自由を与えられていると。他の物質は動物も含めて、神の法に、これは自然法則ですけど、従うだけであって、決して逆らうことはないのですが、人間だけは神の法に従うことができる。逆らうことができるからこそ、自分で選んで従うこともできる。これが人間の特殊性なわけです。特にイスラームでは、人間が知性を持っているから他の動物より優れているというふうには考えません。もちろんそれは人間は理性的な動物であるとアリステレス的な考え方もイスラームにはいっていますけれど、存在論的に、それによって人間が特別に聖別されるということはないんですね。人間はあくまでも神に逆らいうる存在だという、逆らいうる存在であるがゆえに自由に従うことができる、それだけが人間の違いになるわけです。そういう意味でイスラームというのは世界全体のあり方というだけでなく、人間固有のイスラームもあるというふうに考えます。これは2番

目の層になります。そういう意味でイスラームは普遍宗教というか、人間すべての教えになるわけです。それで後でまた詳しく話しますが、イスラームはユダヤ教、キリスト教と基本的な世界観及び歴史観を同じにしていますので、人間の祖先というのは、アダムになるわけです。イスラームはまずアダムの宗教なのです。アダム以来の諸預言者によって人間に伝えられた宗教、それがイスラームということになります。イスラームの考え方では、基本的に人はイスラーム教徒として生まれるというふうに考えているんですね。「人間はイスラーム教徒として生まれる。しかし両親がそれをユダヤ教徒やキリスト教徒にするのだ。」という預言者ムハンマドの言葉がありまして、イスラームでは基本的に人間はイスラーム教徒として考えます。ですので、幼児洗礼のような問題は生じません。ただし、先程の預言者の言葉にある通り、親がキリスト教徒やユダヤ教徒であった場合には、教育によって、本来イスラームの考えるところの正しいイスラームから外れて他の宗教になってしまうと考えますので、両親が他の宗教である場合には両親の教えに従ったというふうにみなすわけですが、そうでなければ、子どもは天性がイスラームですので、もともとイスラームのままであるということで、子どものまま死んだ場合にもイスラーム教徒として葬られたりするわけです。人間は動物の一種でもありますので、人間を含むすべての動物は基本的にイスラームをしているものというのがイスラームの考え方です。

さらに、3番目の層として実定宗教、ポジティブレリジョンとしてのイスラームになります。これは預言者ムハンマドの教えたイスラームだということになります。預言者ムハンマドという人は歴史的な存在であるわけですが、7世紀のアラビア半島で活躍した預言者で、彼が教えた教えがイスラームであると、これがイスラームの3番目の一番表層の部分であって、普通に使う意味でイスラームというのはこれになるわけです。私どもが大学などで宗教を教えるときに、イスラームはいつできたかというような話をする場合、普通預言者ムハンマドが7世紀にアラビア半島で始めた宗教だというような説明の仕方をするわけですね。われわれイスラーム教徒内部で話をするときは、内部で話をする

いっても秘密の話をするわけではないのですが、（笑）イスラームというのはアッラーの教えだというふうに話をするわけで、預言者ムハンマドが始めた宗教だというような言い方は決してしません。そういう預言者の宗教であって、それを預言者ムハンマドが完成したというような言い方をするのですが、普通に言うときには預言者ムハンマドが7世紀に始めた、それがイスラームの1番完成した姿であるというのがイスラームの考え方なわけです。いろいろな預言者によって、時代によって、違う形で表れたわけですが、それが最終的に普遍的な教えとして、人類全体に通用する普遍的な教えとして預言者ムハンマドによって完成されたというのがイスラームの考え方です。

【イスラームにおける文明の交流】

先程から預言者ムハンマドという言い方をしていますが、また諸預言者といっていますが、イスラームでは、預言者が神と普通の人間をつなぐものとしてあります。これはもちろんイスラームでは創造主と被造物をはっきりとわけますので、神と人間、というのは神と他の被造物と同じように全く存在論的に違う存在なのですけど、神の意図を人間にコミュニケーションとして伝えるものという役割を負わされているのが預言者なのです。今日はあまり詳しく触れませんが、預言者、これは旧約聖書の預言者とはほぼ同様な意味です。神の言葉を受けるもの、預かるもの、啓示を受けるものですね。特にこの中でもその預かった啓示を人に伝える役目を負わされたもの、これが使徒というふうになるのですが、この使徒はご存知の通りキリスト教の用語から借りたもので、もともとの意味は単にメッセンジャー、ラスूलといいますがお使いのものの、遣わされたものという意味です。特別な意味はありません。もともとは普通名詞ですけど、それが神の啓示を授かって、さらにそれを人々に伝える使命を帯びた人間、これを預言者あるいは使徒とよびます。

このムハンマドというのは、アブラハムの子孫になります。預言者ムハンマドはアラブ人です。アラブという概念は、文化的にいうとこれは血統ではあり

ません。アラビア語をしゃべるものですね。アラビア語をしゃべる人間というのが現在のアラブという言葉の使い方です。アラビア語の人口は約3億人います。私が関係したエジプトなどはアラブなのです。アラブ連盟に加盟している国が今22カ国あるのですが、これらの人々は血統的にアラブというのではなくて、アラビア語をしゃべる人たちです。これが現在のアラブという言葉の使い方なのですが、ここでいうアラブ、預言者ムハンマドがアラブであるといった場合、これは血統なのです。アラブではいまだに血統概念が非常に強いのですが、その意味で血統としてアラブ、これは何かというと、アブラハム、アラビア語ではイブラヒームといますが、アブラハムにはご存知のように2人の息子がおりまして、長男がエジプト人のハガルとの間に生まれたイシュマエルですね。アラビア語ではイスマールです。次男が正妻のサラとの間に生まれたイサクですね。アラビア語ではイスハークです。このイサクの子孫がイスラエルの民、ユダヤ人になるんですね。アブラハムの長男イシュマエルの子孫、これがアラブ人になります。血統的にアラブ人というのはアブラハムの子ども、イシュマエルの子ども、これがアラブ人なんです。預言者ムハンマドはこのイシュマエルの子孫になります。ユダヤ人とアラブ人というのは血統的にも兄弟であるといわれるのはこのためですが、このときに共通の祖先として重要視されるのがアブラハムです。これは例えば新約聖書のマタイ伝の最初をみると、イエスキリストはアブラハムの子…、と一番最初に出てきます。新約聖書の一番最初に出てくるのはイエスキリストはアブラハムの子孫であるという、そこから始まっているのです。それはこの中東の文化を考えると非常に自然な話なのです。キリスト教というのはアブラハムの教え、これが一番最初に出てくるわけです。イスラームも同じことなんです。イスラームというのはアブラハムの教えを復興したものなんです。本来のアブラハムの教えがあってイシュマエルであり、イサクですね。イサクからユダヤ教がでてきてキリスト教がでてくる。イシュマエルのほうから、アブラハムの教えというもともとイスラームがあって、これがイサクもイシュマエルもこのイスラームを継ぐわけですが、それがこちらの流れではユダヤ教、キリスト教という形で変質していく。

イシュマエルのほうもそうです。こちらのほうも偶像崇拜になっていくわけです。アラブ人は預言者ムハンマドの時代においてはもう正しいアブラハムの宗教を固持していなくて偶像崇拜になっている。要するにイスラームが両系統とも曲がってしまっている。それを立て直したのが預言者ムハンマドであるというのが、イスラームの基本的な理解です。

預言者ムハンマドはアラブ半島に生まれて、基本的にはアラブ半島で生を終えた人なのですが、ではアラブしか知らなかったのかということそうではありません。彼は非常に国際人なのです。もともと12歳の時にシリアに隊商にでます。キャラバンで旅に出るのです。そこでシリアを見ています。シリアというのは現在ではアラブ化していますが、当時はヘレニズム文化の中心の1つだったわけです。それからメッカで多神教徒によって迫害を受けた。その時彼は、後でマディナにヒジュラ（移住）するのは有名な話ですが、それ以前に自分のお弟子さんたちをエチオピアに送っているんですね。当時ハバシャといいますが、エチオピアに80人のお弟子さんたちを送っています。要するにそういう発想ができる国際人だったわけです。また彼の弟子の中にはギリシャ人のスハイブやペルシャ人のサルマーンファールスィーもいて、お弟子さんも、アラブ人だけではなくギリシャ人やペルシャ人も含まれています。また彼のハディース、言行録の中に、「知識を求めよ、たとえ中国に至るまで」というのがあります。知識を求めるためだったら遠い中国までも旅をしろという、そういうハディースがでできます。要するに預言者ムハンマドというのはアラブ人であるわけですが、アラブ世界だけを見ていたのではなく、中国までも視野に入れるような国際人だったわけです。これは別に珍しいことではなく、オリエントというのはもともとひとつの民族だけが生きているという発想自体がないところなんですね。多民族、いろいろな言葉をしゃべるいろいろなエスニシティを持つ人間たちが共生している、それが当然当たり前の世界なわけです。そういうところに生まれたのが預言者ムハンマドであったということです。そしてそういう意味で、預言者ムハンマドは血統的にはアラブですが、そういう非常にコスモポリタンな文化に生まれたわけですが、基本的にはこれは西欧のキリ

スト教世界と同じものであると考えたほうがいいと思います。これは例えば中東史を専門としている三木亘先生がいつているのですが、世界の文明を3つに分けると、西洋と中洋と東洋です。西洋というのは、ユダヤ、キリスト、イスラームの一神教諸派複合という言い方をしています。中洋というのは、ヒンドゥーと仏教で、東洋というのは、仏教と儒教と道教です。こういう基本的な宗教を基層に持つ文化の複合体として西洋というものとがあると。西洋、地中海世界はユダヤ教、キリスト教、イスラーム教という3つの一神教の複合した文明圏ですね。中洋はヒンドゥー教と仏教、東洋はわれわれおなじみの仏教、儒教、道教ですね。こういうふうに考えるほうが世界をみるのは正しいのではないか。基本的には私もそれがいいのではないかというふうに思います。もちろん地理的に見てもヨーロッパというのはもともと地中海の南側を含むラインですね。今われわれがヨーロッパの歴史として学ぶユークリッドやプトレマイオス、アルキメデス、そういう人たちというのはエジプトに生きた人です。ヘレニズム文化の中心は実はエジプトだったわけです。イスラームは預言者ムハンマドの直弟子の時代にすでにエジプトとシリア、ヘレニズム文化の中心地をイスラーム世界の中に組み入れています。そういう意味でイスラームというのは、キリスト教と非常に近いです。これはもう少し抽象的な話としても、キリスト教文明とは一体何なのかというような話をすると、必ず出てくる定義というのは、ヘレニズムとヘブライズムの複合体である、これがキリスト教文明であるという言い方をします。これは必ずいわれることなのですが、それではイスラームはどうなのかというと、イスラームも同じです。ヘレニズムとヘブライズムの複合体、それがイスラームなんです。ヘブライズムについて、こちらのほうはもう説明する必要もないと思いますが、要するに旧約聖書の教え、ユダヤ人の教え、ユダヤ教の教えなのです。ということは、これは先程血統的にアブラハムの2人の息子がユダヤ人とアラブ人の祖先なんだという話をしましたが、これは文化的にもというか、アラビア語とヘブライ語というのは、これはもうほとんど同じ言葉の2つの方言といってもいいぐらいなのです。どちらもセム語なのですが、私はヘブライ語を学生の時に2年ぐらやって、も

う忘れてしまったのですが、ほとんど同じです。例えばヘブライ語では、確か一人称はアニですね。アラビア語ではアナです。二人称はアラビア語はアンタ、ヘブライ語はアッタですね。確か。「彼」というのはアラビア語ではフワなのですが、ヘブライ語だとファーですね。「彼女」はアラビア語だとヒヤですが、ヘブライ語ではヒーですね。日本でも東京弁と大阪弁の違いぐらいの差しかない、あるいはそれよりも小さいぐらいのものです。現代ヘブライ語はもっとそうです。現代ヘブライ語はもっとアラビア語から借用語が多いのですが、文章構造も基本的な語彙もほとんど同じで、アラビア語とヘブライ語はほぼ同じ言葉です。文字が違いますので、非常に違う印象をうけますが、音韻的には非常に近い言葉です。そういう意味でヘブライズムがイスラームの中心にあるということ、これはもうあまり説明する必要がないのですが、ヘレニズム、これもイスラーム文化、文明としてのイスラームの基盤となっています。と申しますのは、今申しました通りイスラーム世界は、預言者ムハンマドの直弟子の時代に、すでにヘレニズムの中心部であるシリアとエジプトを支配下に置いて、そこがイスラームの文化の中心地になっていきます。それで要するに翻訳の時代といいますが、7世紀、8世紀に当時のシリア、エジプトにあったほぼすべてのギリシャ語文献がアラビア語に翻訳されます。実は西欧はギリシャの伝統から一旦切れるんですね。ローマではギリシャ語の文献というのは一旦途切れてしまうのです。後に11世紀から12世紀にかけてイスラーム世界から、要するにアラビア語から重訳のような形でラテン語にギリシャの古典というのは翻訳されます。その後になって東ローマの方からまたギリシャ語から直接的に入ってくるのですが、それまでは一旦アラビアの世界を通じて西欧はヘレニズムの文化を吸収するということになっています。ですので、特にキリスト教の神学のほうでは、特にアリストテレスはイスラームのほうから学ぶんですね。それまではプラトンと若干はいますが、アウグスチヌスとプラトンの教えぐらいしかなかったところへ、特にアベロエスという人の注釈を通じてアリストテレスの神学というものが中世になってキリスト教にはいつてくるというようなことがあります。ですので、アラブの神学の中にはヘレニズムの論理学が深く組み

込まれています。特に様相概念です。必然と可能と不可能ですね。物事というのは必然的であるのか、可能的であるのか、あるいは不可能であるのか、3つの様相に別けて、神の存在を論証していく。この論証形式がイスラームの神学の基礎になっています。そういう意味でギリシャの論理学というのはイスラーム学の中心にあるわけです。という歴史的な意味でもまた学問的な意味でも、ヘレニズムとヘブライズム、このどちらもイスラーム文明の基礎であります。ですのでキリスト教とイスラーム教というのはもともと同じような文化の構成を持っているということであって、この2つがイスラームとキリスト教が別々の文明に属するというような意識は18世紀ぐらいになってできたものではないかと、先程申しました三木さんは申しております。もう少し早いだろうという気もします。もちろん宗教としては敵対しています。それはそのとおりなのです。それは例えばユダヤ教とキリスト教でも同じです。キリスト教とユダヤ教でも宗教としては全く別のものという意識があるわけですが、現在にいたるまでますます西欧では、これも実はユダヤ教もイスラーム世界に残っていたので、そちらのことはほとんど今のユダヤ思想の研究には抜けているのはそれは問題なのですが、それはおいておいて、ユダヤ・キリスト教文明という言い方にはあまり抵抗感はないですね。それは宗教としてのユダヤ教と宗教としてのキリスト教は別であるということが連綿としてあるのですが、文明としては同じものだという考え方ですね。これは実はかなり長い間、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒の間では、要するに地中海の世界ではそう意識されていたのではないかと、そういうふうには三木さんは言っております。それで18世紀ぐらいになって啓蒙主義の後で初めてイスラームは別なのであるというふうには、世俗的な文明観が優勢になって初めてイスラームを排除した西欧という概念がでてきたという考え方があるわけです。ここまでが他文明との比較から見たイスラームの話ですけど、今度はイスラームプロパーの話をしたと思います。

【イスラームにおける聖と政の関係】

先程言いましたように、イスラームは、宇宙の姿、人類の宗教、そして3つ目の意味においては預言者ムハンマドのもたらした宗教です。これがイスラームでは、最終啓示になります。啓示は、預言者ムハンマドで終わります。その後にはもはや預言者はきません。ですので預言者ムハンマドの教えというのは最後の教え、最も完成された最後の啓示ということになります。ですからここで律法ですね。キリスト教の背景をお持ちの方は、律法というとイメージがわくと思うのですが、ムハンマドの律法は最後の律法になります。それはもう変わらないわけです。この律法は、預言者ムハンマドの律法が最後の律法なので、その後はもうこちらの方の立法はもう立法者がいないわけですね。この立法もなくなります。ですから、イスラーム法の考え方ではもはや立法もないわけですね。現在政治学でいう立法・司法・行政の立法はありません。あと司法と行政はありますけれど、最後の律法、預言者ムハンマドの律法に基づいた行政、それに基づいた司法はありますけれど、立法はありません。そういう意味でもはや新しい法をもたらす人はいません。預言者は終わります。ですので、後にくるのは行政と司法だけということになります。

それで行政のほうですね。預言者ムハンマドの政治的な権威はカリフによって継承されます。これは政治的な権威を継承することです。その意味ではイスラームでは政教分離というキリスト教的な考え方というのはそもそも成り立ちません。というのは教のほうはそれを担う機関がないんですね。政しかないわけです。教のほうは、もはや預言者の権威というのは誰にも引き継がれないわけです。これは預言者ムハンマドで終わりました。イスラーム法の文脈からいいますと、政治の権威だけをカリフが受継ぐことになります。ここで気をつけないといけないことは、イスラームを理解する上で非常に重要なことなんですけれど、カリフが政治的な権威を受継ぐのですが、一切の制度的なものが成立しなかったというのが非常に重要なことなんです。これは宗教的な権威、例

えばカトリックだと一番わかりやすいのですが、教皇がいて、それから公会議があって、ヒエラルキーがあるという、そういう制度的な構造がある。そして教会がある。それがヒエラルキー的に構造化されている。そういうものがイスラームでは一切存在しません。これは、教会という言葉から考えるとわかりやすいのですが、キリスト教のいう教会というのは、建物としての側面と人間の法人としての側面の両方があるわけですね。これは日本の仏教でもそうですね。日本の仏教も江戸時代、お寺というのはお寺であると同時に人間を管理しているんですね。そこには檀家としてそこに所属する人間は、家単位で全員所属する。それが国家の統治機能の一部になって組み込まれています。お寺は宗教施設であると同時に人間の法人であるというふうに日本でもなっています。キリスト教でも教会があって人間が信徒集団として帰属するわけですね。ところがイスラームでは、モスクは建物としてのお寺や教会と等価物ですけれども、実は法人としての性格を一切もっていません。モスクはただの建物です。本当にただの建物なんです。そこにはモスクの指導者というような人もいません。そのモスクに教区として所属している信徒もいっさいありません。モスクだけではなくて、モスクの外にももちろんないわけです。例えば日本に何人ムスリムがいるかということは全然わからないわけです。というのはわかりようがないからです。そういうものを登録するところがないからです。どこにもないんですね。私は神戸モスクで1982年に入信しました。現在の日本の組織では、確かにモスクへいくと入信証明書を書いてくれるのですが、それはあくまでも最近の日本の宗教法人の影響であって、それが何らかの拘束力を持つわけではありません。たまたま私の場合入信証明書がありますけれども、それがいない人のほうがはるかに多いです。しかもモスクのほうでもそれをちゃんと管理していませんので、モスクでどれだけの人が入信したのかというようなことはわかりません。あるいは私は日本ムスリム協会に所属していますが、これもせいぜい150人ぐらいです。それでも150人というのは最大なんですね。メンバーシップをとっている団体としては最大なんです。イスラームであることにとってこれはどうでもいいことなんです。

ではイスラーム教徒になるということはどういうことかという、先程言いましたようにイスラームでは基本的には生まれながらにイスラーム教徒だというのが基本ですから、生まれたらみんなムスリムなのです。そうでないところ、われわれが考えるような入信というのは「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはその使徒である」、アラビア語でいうと「ラーイラーハイッラッラームハンマドラスールラー」というんですが、これだけ言うと、もうイスラーム教徒です。(笑)これを別にどこで言ってもいいのです。普通はイスラームの証言法というのがありまして、あとでもっと話しますが、イスラーム法というのは、生活の全領域を含んでいるのですが、この中には訴訟法や証言法というのがあります。イスラームの訴訟法上は、証言は二人のイスラーム教徒、公正な行いの正しいイスラーム教徒の前で証言をすればそれでその証言が認められるという証言法に基づいて、イスラームに入信したことを二人の人間が確認すれば、イスラーム法上イスラーム教徒とみなされるという、一応証言法はあるのですが、神の前では「ラーイラーハイッラッラームハンマドラスールラー」と言えばそれでもうイスラーム教徒になるということになっています。これはもちろんモスクに行く必要もありませんし、どこかの機関に登録する必要もありません。洗礼のような儀式もありません。あるいはそれを認める聖職者もいません。どこで言ってもいいのです。ですからどこでムスリムが生まれているのかさっぱりわかりません。管理するところも全くありません。これがイスラームの特徴なんです。どこにどれだけイスラーム教徒がいるのかわからない。制度がないということは本当に徹底しています。そういう意味で、そもそも誰がイスラーム教徒であるのかすらわからないし、決める機関もどこにもありません。イスラーム世界どこへ行ってもありません。もちろん今いったように神戸モスクは勝手にやっていますが、それはそれだけのことで、それが必要であるという人は誰もいないわけですね。そういう意味でイスラームにはそういう制度が一切ない、これが非常に大きな特徴です。教会の不在ですね。そういう意味で法人としての教会はないわけです。

イスラーム法の話が今ちょっとでましたけれど、イスラームでは法学という

ものが非常に中心的な位置を占めます。キリスト教だと神学部はありますが、キリスト教法学部というものはありません。キリスト教神学部だけです。ところがイスラームでは神学というのものもあることはあるのですが、それよりも圧倒的に重要なのが法学なのです。イスラーム法です。一応イスラーム学の中心はコーランの解釈とかハディースの解釈という対象別のものもありますが、それを別にすれば、神学にあたるものは教義学、信仰簡条、法学とそれから倫理学のようなものがあるわけですが、この法学がイスラーム学の骨格になります。イスラーム法こそが、もちろん神学的にはというか、救済論的にいうと違うのですが、少なくとも教えの制度を見ていく上では重要なのは法学なんですね。この法学というのは8世紀に成立します。10世紀にほぼ確立します。スンナ派の場合四法学派という4つの法学派ができるんですが、その10世紀に確立した後は殆ど変わりません。現在にいたるまで殆ど変わっていません。10世紀に書かれた法学書が現在でもそのまま読まれています。これはもちろんアラビア語で書かれていますけれど、今イスラーム教の世界にいきますと、10世紀、その時に書かれた法学書が高校、大学レベルでそのまま古典として読まれています。これは時代的に10世紀から現代まで殆ど変わっていません。それから地域的にも東はインドネシアから西はモロッコまで、どこにいても同じです。現在もアラビア語の古典で法学教育はされています。これは現在の国家の枠組みとも全く関係がありません。国家の定めた教科書も今あるんですが、教科書のもとになっているのはやはり古典法学であって、ですから、学生たちが、日本の大学でも同じですね。教科書というものはもちろんあるのですが、真面目な学生さんは教科書にあげてある参考文献を読むわけですね。その参考文献はアラビア語の古典なんですね。これは現在にいたるまで変わりありません。なぜこのようなことが可能なのかというと、イスラームでは、先程申しましたように制度というものが一切ありません。ではどうやって教育がなされているかというと、ウラマーと呼ばれる学者が、教育を担っているわけですね。学者の権威というのはあくまでも知識の権威なんですね。国家が裏づけをするというものではないのです。国家が彼は教授だよと認定したからえらいというもの

はなく、知識があるというふうになんか学者なのです。学者の権威は知の権威なわけです。彼はちゃんとクルアーンを知っているな、ハディースを知っているな、イスラーム法を知っているなと人々がわかることによって、その学者の権威は成立します。誰かが裏づけをしたからえらいというものではないのです。国家が裏づけをしたから権威だというものではないのです。社会と密着していますけれど、そういうネットワークがイスラーム世界に広がっている。それが基礎になっているのがイスラーム法の学問の古典である。非常に安定したものでありました。

【イスラーム国家とは】

それでは次にイスラーム国家の話をしてします。イスラーム国家というのは非常に誤解を招きやすい表現でもあります。というのは、実はイスラームには制度がありませんし、国家というものもありません。国家があるという考えが間違いであって、われわれが抱くような国家はありません。そもそもイスラームには法人という概念がありません。これもイスラーム法というものを考えれば、すぐわかることなんでしょうけれど。イスラーム法というのは何かというと、神の命令、神に従うための規範なわけですね。ですから法人なんてものは入ってくる余地がない。例えば法人概念があると、税金は会社が納めるわけですね。しかし会社が天国に行くわけではありませんね。天国に行くのはあくまで人間なんです。地獄に行くのもあくまで人間なわけですね。ですので、会社が責任を負って税金を払うと、社員や社長は払わなくていいと。これはイスラームではおかしいですね。もちろん会社にあたるものはあります。私は商法はあまり詳しくないのですが、それは今の商法では合資会社にあたるんですね。自分のお金を預ける、他の人間も預ける、そして出資率にあわせて利益を折半する、そういう形ですね。そしてその利益に応じて個人は個人として税金、宗教税を払うのです。すべて個人が個人として責任を引き受けるわけですね。ですから本当は国家ではないんです。国家ではなくて、カリフがいてあるいは裁判官がいて、と

いうふうに、それぞれの職務があつて、職務に応じて人々が各自責任を負っているだけなのですが、とりあえずイスラーム国家という言い方をします。イスラーム国家という言い方をして近代国家概念と比べていくと違いがわかると思います。とりあえず、イスラーム国家というものを想定してそれを比較してみますと、近代国家というのは古典的な国家学の用法によると、まず国土があつて国民がいて主権があります。これで初めて国家が成立します。この3つの要素が国家の三要素といわれます。国土にあたるもの、これがなにかというと、イスラームでは大雑把にいうと、ダール・アル＝イスラーム、カリフを長とする国家です。ダールは家です。アルは定冠詞です。これが国土です。そして国民はウンマです。ウンマというのはイスラーム教徒の共同体です。主権にあたるもの、これがカリフ制度なんです。これをダール・アル＝イスラームとウンマとカリフというものを定義しますと、どれもイスラーム法を基礎としていることがわかります。ダール・アル＝イスラームというのは、これはイスラーム法が統治しているところです。イスラーム法が行われているところ、これがダール・アル＝イスラームなんです。

ウンマとは何かというと、イスラーム法を守る人たちなんですね。イスラーム法を守る人たちの集まり、これがウンマです。カリフ制度というのはイスラーム法というものを強制的に施行すると、これがカリフ制度ですね。イスラーム国家とはどういうものかということ、レジュメのほうにも書いてありますけれど、イスラーム世界は、カリフを長とする国家の中に、イスラーム教徒共同体、これがウンマですね、と他宗教共同体が、イスラーム公法に従いつつ、私法の領域では共同体毎に自治を享有しつつ共存するシステムであるというふうに言うことができます。これはもう少し説明しますと、イスラーム法を施行するのがカリフの存在意義です。これはイスラームでは先程も言いましたように、国家はありません。国家は個人の生活を何もかも面倒をみるという考え方はありません。そうではなくて、そういう意味では小さな国家なんですね。一番重要な使命はまずイスラームの教義を守る、イスラーム教徒を守る。それはまず外に対して、外の世界

からの侵略からイスラーム世界を守ることであって、内部においてはイスラーム法に対する審判、それからイスラーム世界の内部を守ることです。内部における秩序の維持と外部に対する防衛、その両方を担っているのがカリフ制度です。その中で、イスラームではイスラーム公法というのがあります。イスラーム公法というのは例えば、刑法とか、あるいは商売をした場合の紛争解決のシステムなのですが、イスラーム法は、公法と私法の考え方までいぶん西欧の法とは違い、例えば殺人などはイスラームでは私法にはいりますが、大雑把にいうと、公的な秩序の維持、これはイスラーム法が共通に適用されます。しかしそうではない部分に関しては各宗教共同体が自治を持つ、これがイスラームの世界の基本的な構造です。ですから、イスラーム国家というのは必ずしもイスラーム教徒だけではありません。異教徒もいるわけです。異教徒がいるのは当然の現実としてあるわけです。そこでは法が二重になっています。これは現在でも例えばイスラーム教の国ではないのですが、イスラームの文明のシステムをそのまま受継いでいるイスラエルでは実はイスラーム法が適用されているんですね。というのは、イスラエルは、もともとオスマン朝の法律をそのまま使っていたので、今は少し変わっていますが基本はオスマン朝の法律を使っているんですね。そこでは、各宗教共同体、例えば、ユダヤ教徒がいて、キリスト教徒がいて、キリスト教でもカトリックとギリシャ正教ですね、東方正教会がいて、アルメニア正教会がいて、さらにドルーズ派がいます。そういう各宗教コミュニティがそれぞれの宗教法を持っているんですね。特にこれは習俗、親族法、例えば結婚とか離婚とかお葬式とかそういったものは、すべて各宗教共同体が自治権を持っています。これはイスラエルでもとられています。ですので、キリスト教といってもわれわれが西欧で思っているキリスト教とは全然違うんですね。実はイスラーム世界というのは、非常にたくさんのキリスト教が未だに残っています。例えばコプト教会、あるいはアッシリア教会など、カトリック教会が成立して西欧のほうでは消されてしまった宗派がイスラーム世界にはすべて残っています。たくさんのキリスト教の宗派が残っているんですが、彼らはそれぞれ自分たちの伝統、自治を守っています。

それで異教徒との関係ということですが、イスラーム暦は太陰暦ですので西欧よりすこし短いですが、1年以上イスラーム世界にいる人間は、イスラーム世界を出て行くかあるいはズインミーとして残るかどちらかです。ズインミーというのは庇護民と訳されていますけれど、要するにイスラーム世界にはいり永住することを決意した人たちです。これは基本的に個人ではなくて共同体です。一人でということはないですね。さっきもいったように、例えばカトリックだとかあるいはコプト教会というような形の宗教共同体の人たち、集団に組み入れられるんですね。これは税金をイスラーム共同体に払いますが、かわりに軍務が免除されます。免除といってもいいですし、武装が禁止されるといってもいいですが、要するに軍務には奉仕しない。その代わりに税金を払う。そのかわりに生命と財産と信仰とそれから名誉ですね、これがイスラームの人とまったく同じように守られる。そういうシステムです。これがズインミー、庇護民という人たちです。それとは別に、ムスターミンという寄留民あるいは安全保障保持者がいます。これは外の世界から一時的にイスラーム世界にくる人に対して与えられる安全保障ですが、これを与えられた人間はイスラーム教徒と同じようにやはり生命、信仰、財産、名誉を守られます。これは1年以内です。1年たったら出て行くか、ズインミーとして残るかどちらか決めなければいけないのですが、これは個人です。ズインミーとムスターミンの違いは、ズインミーのほうはカリフが決めるものです。カリフが1つの共同体に対して庇護権を与えます。そうすると彼らは自分たちの共同体としての宗教法を適用する自治権があるのですが、こちらの安全保障民のほうはカリフではありません。誰でもいいんですね。ダール・アル＝イスラームに住んでいるイスラーム教徒が、個人でもかまいませんし、女性でもかまわないし、奴隷でもかまわないのです。イスラームでは奴隷は、今は廃止されましたが、ありました。わたしがこの人間を受け入れますといって受け入れたら、その人間に対してはダール・アル＝イスラームのすべてのイスラーム教徒がその人間の生命、安全、財産、信仰、名誉を守らなければならないのです。その人間は守られます。これがイスラーム世界内部の異教徒との関係です。

イスラーム世界の外にいる異教徒との関係ですが、これは基本的には戦争なんですね。ダール・アル＝イスラームの対義語はダール・アル＝ハルブといいます。これは文字通り訳すと戦争の家です。ダール・アル＝イスラーム、イスラームの法が支配する世界の外は要するに無法地帯なんですね。イスラーム的になると、法が支配するのがダール・アル＝イスラームであって、ダール・アル＝イスラームの外にあるのは無法地帯なんです。これがイスラームの基本的な世界観です。ですので、外の世界とは基本的に戦争状態にあるのです。これはもちろん法的に戦争状態にあるということは必ずしも実際に戦争があることは意味しません。これはあくまで法的な概念ですので、実際に戦争があるかどうかは関係ないですね。例えば今日本と北朝鮮の間には和平条件が交わされていないので、法的には戦争状態にあるわけですが、実際に戦争があるということは必ずしも意味しないのですが、とにかく基本は戦争なんですね。イスラーム世界においてはダール・アル＝イスラームが法の支配するところで、その外にあるのはあくまでも無法地帯です。そういうことから、基本的には戦争状態にあります。しかし和平を結ぶことはできるんですね。ですので、これも法学派によって説はあるのですが、基本的には和平というのは10年間が最長期限です。10年間の和平が結べます。もちろん更新も可能です。10年以上の和平は結べないというのが基本です。では戦争状態にあるところとどういう関係にあるのかというと、これは今いったように交渉によって和平を結ぶことができます。そういう意味でイスラーム法は神の法ですので、戦時国際法というのがありますが、これは西欧の法の概念とは違って、国際法は基本的には交渉によって対外関係で決まるものではありません。そうではなく、戦時国際法も基本的には天恵法なんですね。神から授かったものです。ですから、相手が誰であれ、相手がどういう法をもっていようと、イスラーム教徒にはイスラームの戦時国際法があって、それを守らなければなりません。例えばこの前のビン・ラーディンのアメリカの市民は全員殺さなければならないというのがありましたけれど、あれに対してイスラームの世界でそれはおかしいという反論がでたんですが、それは二重に間違っています。というのは、あれは実は正確にビン

・ラーディンの言っていることを聞くと、アメリカ人は、マダニーユーンとアスカリーユーン、民間人と軍人の別なく殺されなければいけないという、そういう議論ですね。あれをイスラーム法の文脈でいうと、これは彼自身が言っているんですが、イスラームには民間人と軍人という区別はありません。イスラームの戦時国際法では民間人と軍人は区別しません。ではなくて、イスラーム戦時国際法で決めている区別というのは、成人男性、これは戦闘員とみなされます。成人男性は武装しているかどうかに関わらず全員戦闘員とみなされます。しかし子ども及び女性及び老人及び修道士がはいっていますが、これは戦闘員とみなしません。非戦闘員です。非戦闘員を傷つけてはならない、これがイスラーム国際法なんです。ですから、マダニーユーンとアスカリーユーン、つまり民間人と軍人という区別は無効なんであるというのが彼の意図なんですね。そこでは女子どもというのは犠牲にしてはならないというのは当然の前提として、イスラーム教徒であれば誰でもわかるんですね。ですので、これも西欧のメディアが間違っただけで伝えています。これは知識がないので当然なのですが、それはそれとしてイスラーム世界のほうからあれはおかしいと言っているのは意図的にウサマ・ビン・ラーディンを悪者にするために言っているようなところがあります。それはともかくとして基本はこうなっています。ですので、イスラームの場合は国際法も他の国との交渉で決まる部分というのも交渉の余地は認められていますが、基本的には神の法があって、それを守らなければならないということになります。

そろそろ時間だと思いますが、もう1点だけ、ターリバーンのこの前にありました大仏の破壊についてちょっと一言だけいっておきたいと思います。バミヤンの石仏の破壊について日本でもずいぶん抗議したわけですが、あれもイスラーム法的にいうと、そもそも報道自体の枠組みが非常に私は間違っていると思います。というのは、あれを他宗教に対する弾圧あるいは迫害とみるというのは、イスラーム法の立場からすると非常にばかばかしい話です。イスラームでは先程いいましたようにズインミーあるいはムスターミンについては権利が守られます。それは生命、財産、信仰、名誉ですが、そういう意味ではイス

ラームでは異教徒の権利を守っています。ではバーミヤンの仏像というのはなんだったのかというと、あれは要するにイスラームは法で考えますから、守るべき法益があれば守るのですが、あそこには守るべき法益がないのです。つまりあれは誰のものでもないからです。単純な話です。あれは誰のものかということですね。あの仏像は石仏ですから山なんですね。イスラーム法では財産は私有財産と共有財産と国有財産に分かれますけれど、山は国有財産になります。国有財産というのはその国の統治者、行政権者の処分下にあります。個人のものではありません。あれは国有財産ですから公共の場にあります。公共の場にあるものというのはイスラーム公法に従いますから、当然石仏、偶像というふうに判断すれば、行政権者が破壊する。そこにはどこにも守るべき法益がないわけです。という場所なんです。イスラーム法で考えれば非常に単純な話ですね。あれはターリバーン政権が自分の支配下にあるもの、それはイスラーム法では偶像というものはそもそも財というふうにみなされません。というのはこれは例えばイスラーム教徒にとっては、ご存知だと思いますが、豚、あるいはお酒は財産ではないんですね。あれはごみなんです。ごみというか要するに財産的価値がないんですね。ですから法益が守れないんですね。それと同じなんです。偶像というのも同じようなものとして、そもそも財産ではないのです。そういうことであって、あれは破壊されたんですね。破壊しないという選択肢ももちろんありました。破壊するにしろ破壊しないにしろ、それは行政の対応の余地にありますので、どちらでもよかったのですが、ターリバーン政権は破壊した、それだけの話なんですね。というところを、あれを一体誰のものかということを議論しないままに、破壊するのはおかしいという議論をしている。しかもそれが宗教に対する非寛容という形で非難すると、イスラーム法に対する理解をしないで、宗教の寛容に反するという名前で、非常に宗教的寛容に反するということを私はやっているのではないかと思ったわけです。ともかくイスラームでは常に行為というのは法学によって判断されるということを知ってもらおうと非常にイスラーム世界の動きがクリアに見えるのではないかと、いうふうに考えています。それではここまでで話を終わらせていただきます。